

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2020-84486

(P2020-84486A)

(43) 公開日 令和2年6月4日(2020.6.4)

(51) Int.Cl.

E O 4 D 13/064 (2006.01)

F I

E O 4 D 13/064 5 O 1 A

E O 4 D 13/064 5 O 2 A

テーマコード (参考)

審査請求 未請求 請求項の数 4 O L (全 11 頁)

(21) 出願番号 特願2018-217420 (P2018-217420)
 (22) 出願日 平成30年11月20日 (2018.11.20)

(71) 出願人 000165505
 元旦ビューティ工業株式会社
 神奈川県藤沢市湘南台1丁目1番地2 1
 (74) 代理人 100095337
 弁理士 福田 伸一
 (74) 代理人 100174425
 弁理士 水崎 慎
 (74) 代理人 100203932
 弁理士 高橋 克宗
 (72) 発明者 船木 元旦
 神奈川県藤沢市湘南台1丁目1番地2 1
 元旦ビューティ工業株式会社内

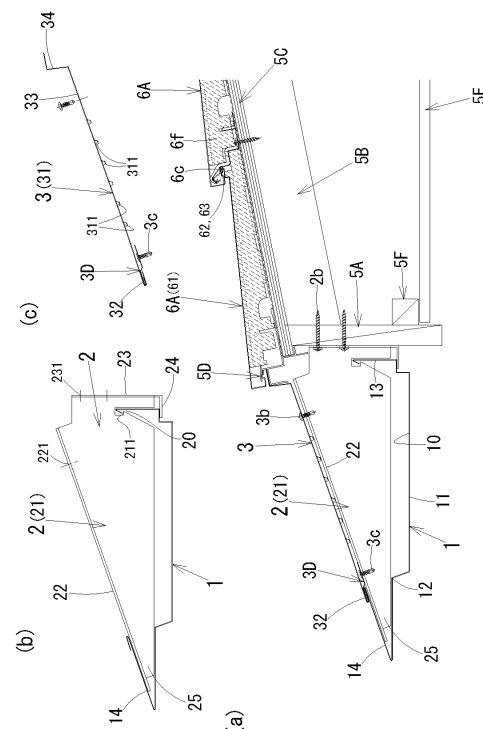
(54) 【発明の名称】 軒先構造、及びその施工法

(57) 【要約】

【課題】軒樋を安定に且つ高い支持強度にて保持でき、上下何れから突発的な応力が加えられても軒樋やカバー材の破損等を防止できる軒先構造、及びその施工法を提供する。

【解決手段】本発明は、基端が建築物の躯体 5 A に固定されると共に、軒先側へ延在する支持材 2 と、支持材 2 に設けた取付支持部 2 1 に、建築物側の側面 1 3 が支持される軒樋 1 と、該軒樋 1 の開放上面を覆うカバー材 3 と、からなる軒先構造であって、軒樋 1 の軒先端には、支持材 2 の軒端 2 4 に係合され、更にカバー材 3 の下端 3 2 と連絡される係合部 1 4 が設けられていることを特徴とする。

【選択図】 図 1



【特許請求の範囲】**【請求項 1】**

基端が建築物の躯体に固定されると共に、軒先側へ延在する支持材と、前記支持材に設けた取付支持部に、建築物側の側面が支持される軒樋と、該軒樋の開放上面を覆うカバー材と、からなる軒先構造であって、前記軒樋の軒先端には、前記支持材の軒端に係合され、更に前記カバー材の下端と連絡される係合部が設けていることを特徴とする軒先構造。

【請求項 2】

支持材の取付支持部は、下方から挿着可能な溝状空間に形成されていることを特徴とする請求項 1 に記載の軒先構造。

10

【請求項 3】

カバー材の上端は、建築物の外装下地に固定されていることを特徴とする請求項 1 又は 2 に記載の軒先構造。

【請求項 4】

請求項 1 ～ 3 の何れか一項に記載の軒先構造を施工する方法であって、支持材の基端を固定すると共に他端を軒先側へ延在させる第 1 の工程と、前記支持材に設けた取付支持部に、軒樋の建築物側の側面が支持され、前記支持材の軒先端に前記軒樋の軒先端に係合させるように配設する第 2 の工程と、前記軒樋の開放上面を覆うようにカバー材を臨ませ、その下端を前記軒樋の軒先端と連絡する第 3 の工程と、からなることを特徴とする軒先構造の施工法。

20

【発明の詳細な説明】**【技術分野】****【0001】**

本発明は、軒樋を安定に且つ高い支持強度にて保持でき、上下何れから突発的な応力が加えられても軒樋やカバー材の破損等を防止できる軒先構造、及びその施工法に関する。

【背景技術】**【0002】**

従来、屋根の樋としては、軒先に設ける軒樋が一般的に広く知られている。

この軒樋を固定する構造（機構）としては、例えば特許文献 1 ～ 3 等に示されるものが広く知られている。

30

特許文献 1 には、軒樋と軒先前面との間隔をその下方において閉塞するカバー材を取り付け、該カバー材に設けた支持片（係止部）にて軒樋の一方の側面の上端（耳部）に係止する構造が記載されている。

特許文献 2 には、建物の外壁に固定する軒樋支持装置 6 に対し、多孔体 5 を含む上側部材 3 を上面側に、軒体本体 1 である下側部材 4 を吊り保持する構造が記載されている。

特許文献 3 には、外壁等に固定する軒樋カバー固定具 1 の基端側に軒樋 N の軒先側の側面の上端を吊り保持し、軒樋 N の他方側の側面の上端を上方からくわえ込むように固定する構造が記載されている。

【先行技術文献】**【特許文献】**

40

【0003】

【特許文献 1】実開平 5 - 3 8 1 5 3 号公報

【特許文献 2】特開 2 0 0 0 - 2 9 1 2 1 3 号公報

【特許文献 3】特許第 5 2 3 4 2 7 8 号公報

【発明の開示】**【発明が解決しようとする課題】****【0004】**

しかしながら、前記特許文献 1 の構造では、軒樋自身の重量や雨水等による荷重も取付部である耳部に集中するため、軒先としての意匠性が乏しく、雨水を受けるためだけの機能のみを採用したものであり、見栄えが悪く、意匠性に乏しいものであった。

50

また、前記特許文献 2 の構造では、軒樋支持装置 6 に軒樋本体 1 等の下側部材 4 を吊り保持するので、この軒樋支持装置 6 の固定部分に、軒樋本体 1 の自重や全ての荷重が集中するため、片持ち状となって、降雪時等に破損する恐れのあるものであった。

さらに、前記特許文献 3 の構造でも、軒樋カバー固定具 1 の固定部 4 に、軒樋 N の自重や全ての荷重が集中するため、片持ち状となって、降雪時等に破損する恐れのあるものであった。

【 0 0 0 5 】

そこで、本発明は、軒樋を安定に且つ高い支持強度にて保持でき、上下何れから突発的な応力が加えられても軒樋やカバー材の破損等を防止できる軒先構造、及びその施工法を提案することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【 0 0 0 6 】

本発明は、上記に鑑み提案されたものであって、基端が建築物の躯体に固定されると共に、軒先側へ延在する支持材と、前記支持材に設けた取付支持部に、建築物側の側面が支持される軒樋と、該軒樋の開放上面を覆うカバー材と、からなる軒先構造であって、前記軒樋の軒先端には、前記支持材の軒端に係合され、更に前記カバー材の下端と連絡される係合部が設けられていることを特徴とする軒先構造を提案するものである。

【 0 0 0 7 】

また、本発明は、前記軒先構造において、支持材の取付支持部は、下方から挿着可能な溝状空間に形成されていることを特徴とする軒先構造をも提案する。

【 0 0 0 8 】

また、本発明は、前記軒先構造において、カバー材の上端は、建築物の外装下地に固定されていることを特徴とする軒先構造をも提案する。

【 0 0 0 9 】

さらに、本発明は、前記軒先構造を施工する方法であって、支持材の基端を固定すると共に他端を軒先側へ延在させる第 1 の工程と、前記支持材に設けた取付支持部に、軒樋の建築物側の側面が支持され、前記支持材の軒先端に前記軒樋の軒先端に係合させるように配設する第 2 の工程と、前記軒樋の開放上面を覆うようにカバー材を臨ませ、その下端を前記軒樋の軒先端と連絡する第 3 の工程と、からなることを特徴とする軒先構造の施工法をも提案するものである。

【発明の効果】

【 0 0 1 0 】

本発明の軒先構造は、軒樋の建築物側の側面を、建築物の躯体に固定した支持材の取付支持部を支持させ、軒先端に設けた係合部を、支持材の軒端に係合させている構造であって、軒樋の左右端を安定に保持できる。さらに、軒樋とカバー材との間に支持材を介在させたので、下面側から突発的な応力が加えられても、この支持材の補強作用で軒樋の破損等を防止することができる。特に側面視が略三角状の支持材を用い、カバー材を支持するようにした場合には、上面側から突発的な応力が加えられても、この支持材の補強作用でカバー材の破損等を防止することができる。

【 0 0 1 1 】

また、支持材の取付支持部は、下方から挿着可能な溝状空間に形成されている場合、該溝状空間に対して軒樋の建築物の側面を下方から容易に取り付けることができる。

【 0 0 1 2 】

また、カバー材の上端は、建築物の外装下地に固定されている場合、カバー材が軒樋や支持材を引っ張るように保持する役目を果たすので、各部材の一体性が極めて高くなり、且つ支持強度が極めて高いものとなる。

【 0 0 1 3 】

更に、前記軒先構造の施工法は、第 1 ～ 第 3 の何れの工程も、特殊な治具や装置等を用いることもなく容易に実施でき、前述のように有用な軒先構造を施工できる。

【図面の簡単な説明】

10

20

30

40

50

【 0 0 1 4 】

【図 1】(a) 本発明の第 1 実施例の軒先構造を示す側断面図、(b) それに用いた支持材及び軒樋を示す側面図、(c) それに用いたカバー材及び吊子の側面図である。

【図 2】(a) 第 2 実施例の支持材を示す斜視図、(b) その側面図、(c) その平面図、(d) その折り曲げ成形前の展開図、(e) 軒樋を示す側面図である。

【図 3】(a) 第 3 実施例の支持材及び軒樋を示す側面図、(b) それらを用いた軒先構造の一例を示す側断面図である。

【図 4】(a) 第 4 実施例の支持材及び軒樋を用いた軒先構造を示す側断面図、(b) それに用いた軒樋を示す側面図、(c) 第 5 実施例の支持材を示す斜視図、(d) その側面図である。

10

【図 5】第 5 実施例の支持材を用いた一例の軒先構造を示す側断面図である。

【発明を実施するための形態】

【 0 0 1 5 】

本発明の軒先構造は、基端が建築物の躯体に固定されると共に、軒先側へ延在する支持材と、前記支持材に設けた取付支持部に、建築物側の側面が支持される軒樋と、該軒樋の開放上面を覆うカバー材と、からなる軒先構造であって、前記軒樋の軒先端には、前記支持材の軒端に係合され、更に前記カバー材の下端と連絡される係合部が設けられていることを特徴とする。

【 0 0 1 6 】

本発明の軒先構造は、該軒先構造の表裏の化粧面を形成する軒樋やカバー材の内部又は裏面側に、支持材を用いたものであり、軒樋やカバー材としては、専ら通し材を用いるが、複数の組み合わせであってもよく、各種の金属板材や硬質樹脂成形板等が用いられる。一方、支持材としては、専ら短幅材を所定間隔で複数用いるが、高い支持強度を求められるので、その耐久強度を備える金属金具や厚肉の樹脂成形品等が用いられ、例えば後述する図示実施例に示すように略三角状の金属板材の周辺を略直交状に折り曲げ加工した成形品でもよい。

20

【 0 0 1 7 】

前記軒樋は、雨水等を排水する内部空間（排水部）を有するものであり、底面と二つの側面とからなる断面略 U 字状に形成され、建築物側の側面が、建築物の躯体に固定した支持材に取り付けられ、軒先側には、係合部が設けられる構成である。

30

この軒樋の排水部は、前述のように内部空間全体を指すが、通常程度の降雨であれば、底面近傍のみを雨水等が流れるようにし、その上方に支持材が配設されるようにすることが望ましい。底部近傍の上方に支持材が配置されることにより、支持材の下方部分が常に雨水に浸っている状態を回避でき、特に金属板材等の成形品である場合等における腐食等を極力避けることができる。

【 0 0 1 8 】

また、前記軒樋の係合部は、後述する図示実施例では、上方へ折り返して形成されたものであるが、カバー材の下端に連絡（接続）されるものであればその具体的形状を限定するものではない。この係合部が、カバー材の下端に連絡（接続）されるので、軒樋の軒先端をカバー材で引っ張るように保持する構造となる。

40

この係合部が、後述する図示実施例のように支持材の軒先端に係合される場合には、カバー材は軒樋ばかりでなく支持材をも引っ張るように保持するので、支持強度は更に高くなる。

【 0 0 1 9 】

前記カバー材は、前記軒樋の開放上面を覆う部材であって、軒樋の内部に降雪が堆積したり、落ち葉等が侵入、堆積することを防止する部材であり、特にその材質（材料）を限定するものではなく、前述のように通し材でもよいし複数の組み合わせでもよい。なお、このカバー材は、軒樋の開放上面の全面を覆うものでも一部のみを覆うものでもよい。

このカバー材の表面には、雨水を内部へ導く導水口、例えば小径のスリット孔が形成され、該導水口の存在により、降雪の堆積や落ち葉等の浸入の防止も果たされる。

50

このカバー材としては、経年の使用により脱離や飛散しないものであれば、金属メッシュ材（金網状材）でもよい。この金属メッシュ材の開口寸法については、前記導水口と同様に広過ぎると落ち葉等の侵入が生じるため、その侵入を防止して雨水を導水できるものであればよい。

なお、脱離や飛散を防止する部位を、このカバー材に形成してもよいし、前記軒樋又は支持材に設けていてもよい。

【 0 0 2 0 】

前記支持材は、基端が建築物の躯体に固定されると共に、他端が軒先側へ延在する部材であって、前記軒樋の内部、望ましくは常時排水部の上方に配設されるものである。

この支持材としては、後述する図示実施例に示すように側面視が略三角状に形成されることが望ましいが、この場合、その傾斜状辺の上方にカバー材が沿い、その底辺の下方に軒樋が配設されるので、カバー材の上方から、或いは軒樋の下方から突発的な応力が加えられた際に、この支持材で軒樋やカバー材の破損等を防止することができる。即ちこの支持材は、軒樋やカバー材の補強材としても作用するものである。

【 0 0 2 1 】

この支持材の軒先端には、後述する図示実施例のように前記軒樋に形成される係合部が係合する場合がある。この場合には、前記カバー材は軒樋ばかりでなく支持材をも引っ張るように保持する。また、軒樋と支持材との一体性も向上する。

【 0 0 2 2 】

この支持材には、基端に建築物の躯体に固定するための固定部と、前記軒樋の建築物側の側面が取り付けられる取付支持部が設けられるが、これらの固定部や取付支持部については、特に形状等を限定するものではないし、それぞれ複数設けてもよい。

後述する図示実施例では、縦片に固定具を打ち込む部分を固定部とし、軒樋の建築物側の側面の下端を載置状に受ける部分を下方取付部とし、側面の上端を折り返した部分の下端を掛止状に受ける部分を上方取付部としたが、特にこれらに限定するものでもない。

なお、前記取付支持部を、下方から挿着可能な溝状空間に形成した場合、該溝状空間に対して軒樋の建築物の側面を下方から容易に取り付けることができる。

【 0 0 2 3 】

これらの部材から構成される軒先構造を施工する方法は、以下の通りである。

まず、第 1 の工程として、支持材の基端を固定すると共に他端を軒先側へ延在させる。

次に、第 2 の工程として、前記支持材に設けた取付支持部に、軒樋の建築物側の側面が支持され、前記支持材の軒先端に前記軒樋の軒先端が係合させるように配設する。

最後に、第 3 の工程として、前記軒樋の開放上面を覆うようにカバー材を臨ませ、その下端を前記軒樋の軒先端と連絡する。

【 0 0 2 4 】

以上説明した本発明の軒先構造は、基端に建築物の躯体に固定した支持材に、軒樋の建築物側の側面を取り付け、軒先端に設けた係合部を、支持材の軒端に係合させている構造であって、軒樋の左右端を安定に保持できる。さらに、軒樋の内部に支持材が配設されているので、下面側から突発的な応力が加えられても、この支持材の補強作用で軒樋の破損等を防止することができる。特に側面視が略三角状の支持材を用い、カバー材を支持するようにした場合には、上面側から突発的な応力が加えられても、この支持材の補強作用でカバー材の破損等を防止することができる。

【 0 0 2 5 】

さらに、カバー材の上端が、建築物の外装下地に固定されている場合には、カバー材は軒樋や支持材をも引っ張るように保持するので、支持強度が極めて高くなり、カバー材を含めた三部材の一体性も向上する。

【 実施例 1 】

【 0 0 2 6 】

図 1 (a) に示す本発明の第 1 実施例の軒先構造は、基端が建築物の躯体 5 A に固定されると共に、軒先側へ延在する支持材 2 と、前記支持材 2 に設けた取付支持部 2 6 に、建

10

20

30

40

50

建築物側の側面 1 3 が支持される軒樋 1 と、該軒樋 1 の開放上面を覆うカバー材 3 と、からなる。

【 0 0 2 7 】

前記軒樋 1 は、雨水等を排水する内部空間（排水部）を有する通し材であり、底面 1 1 と二つの側面 1 2 , 1 3 とからなる断面略 U 字状に形成され、建築物側の側面 1 3 が、建築物の躯体 5 A に固定した支持材 2 に取り付けられ、軒先端側には、表面側へ折り返し状の係合部 1 4 が設けられる構成である。

第 1 実施例における軒樋 1 の排水部（内部空間）は、図 1（b）や図 2（e）に示すように略水平状の底面 1 1 の軒先端側（図面では左側）に、傾斜面 1 2 1 と水平面 1 2 2 とで構成される段状の側面 1 2 が形成され、前記底面 1 1 の建築物側（図面では右側）には、略垂直状に起立する側面 1 3 が形成され、これらの底面 1 1 及び側面 1 2 , 1 3 にて断面略 U 字状の雨水等の排水路が形成されている。側面 1 2 を段状に形成したことで、最底部に常時排水部 1 0 が形成され、通常程度の降雨であれば、該常時排水部 1 0 を雨水等が流れるようにした。

【 0 0 2 8 】

前記軒樋 1 の係合部 1 4 は、支持材 2 の軒端に係合されるものであり、更にカバー材 3 の下端とも連絡される部位である。

この第 1 実施例における係合部 1 4 は、傾斜状の上面と水平状の下面とが鋭角状に連結され、傾斜状上面の上端を折り返した形状であって、記カバー材 3 の下端に設けた折り返し状の軒先端 3 2 と係合状に連絡（接続）されている。なお、その係合部分には、支持材 2 にビス固定（ビス 3 c）された吊子 3 D が介在されている。

【 0 0 2 9 】

前記支持材 2 は、基端が建築物の躯体 5 A に固定されると共に、他端が軒先端側へ延在する金属板材の折り曲げ加工（成形）品であって、前記軒樋 1 の内部空間、前記常時排水部 1 0 の上方に配設される部材である。

第 1 実施例における支持材 2 は、図 1（b）に示すように略三角状の平板部 2 1 の上辺に傾斜面部 2 2 が形成され、側辺に略垂直状の縦面部 2 3 が形成され、該縦面部 2 3 の下端を略水平状に折り曲げて水平支持面 2 4 が形成され、前記平板部 2 1 には、下方が開放する溝状空間 2 0 が形成されている。

【 0 0 3 0 】

前記支持材 2 の傾斜面部 2 2 は、カバー材 3 を配設した際にその化粧面 3 1 の裏面側に位置する部位（受支部）であり、前記縦面部 2 3 は、躯体 5 A に沿わせて固定する固定部である。そのため、これらの傾斜面部 2 2、縦面部 2 3 には、3 b, ビス 2 b を打ち込むための孔 2 2 1, 2 3 1 がそれぞれ形成されている。

また、前記水平支持面 2 4 は、前記軒樋 1 の建築物側の側面 1 3 の下端（L 字状部分）1 3 1 を支持する下方取付部であり、前記溝状空間 2 0 の上端付近の段状部分が、前記軒樋 1 の側面 1 3 の上端を折り返した部分の下端 1 3 2 を掛止状に受ける上方取付部 2 1 1 である。

さらに、この支持材 2 の軒端であって、前記軒樋 1 の係合部 1 4 が係合する略三角状部分を被係合部 2 5 とした。

【 0 0 3 1 】

前記軒樋 1 の開放上面を覆うカバー材 3 は、前記軒樋 1 の内部に降雪が堆積したり、落ち葉等が侵入、堆積したり、鳥類等が巣作りすることを防止する部材であり、通し材でも複数の組み合わせでもよい。

第 1 実施例におけるカバー材 3 は、図 1（c）に示すようにその表面（化粧面 3 1）には雨水を内部へ導く導水口 3 1 1 として複数の小径のスリット孔が形成され、その下端である軒先端 3 2 が形成されている。また、この化粧面 3 1 の水上端近くを、ビス 3 b にて支持材 2 に固定する固定部 3 3 とし、更にその水上端を外装下地 C に連絡される上端部 3 4 としている。

前記軒先端 3 2 は、化粧面 3 1 の下端を裏面側へ折り返して前記軒樋 1 の係合部 1 4 の

傾斜状上面の上端（支持材 2 にビス 3 c にて固定した吊子 3 D を介して）と係合するヘアピン状に形成されている。

前記上端部 3 4 は、化粧面 3 1 の水上端に位置する逆 L 字状部分であって、当該第 1 実施例では、外装下地 5 C に固定された軒先唐草 5 D に取り付け固定されている（固着具は図示していない）。

【0032】

前述の軒樋 1、支持材 2、カバー材 3 以外の構成を以下に簡単に説明する。

図中の 5 A は略垂直状に配設された躯体（鼻隠し壁面）、5 B は H 形鋼、5 C はその軒棟方向に敷設された木毛セメント板（外装下地）、5 E は天井材、5 F は角鋼であって、6 A は外装材、6 c は外装材を保持する吊子、6 f は外装材の裏面側に配設された断熱材である。

そして、横葺き外装材である外装材 6 A は、略平坦状の面板部 6 1 の軒側、棟側に設けられて相互に係合する軒側成形部 6 2、棟側成形部 6 3 を備え、外装下地 5 C に固定された吊子 6 c 等にて取り付けられ（敷設され）ている。

また、前記軒先唐草 5 D は、外装下地（5 C）の軒先部分に嵌合状に取り付けられ、軒先側へ延在して外装材 6 A の軒先端に係合させる被係合部と、該被係合部よりも更に軒先側へ突出して前記カバー材 3 を固定する被固定部と、を備える（固定具等は図示していない）。

【0033】

このような構成を備える本発明の軒先構造は、軒樋 1 の建築物側の側面 1 3 を、建築物の躯体 5 A に固定した支持材 2 に取り付け、軒先端に設けた係合部 1 4 を、支持材 2 の軒端（軒先端）に係合され、更にカバー材の下端（軒先端 3 2）と接続しているので、軒樋 1 の左右端（1 4, 1 3）を安定に保持できる。さらに、軒樋 1 とカバー材 3 との間に支持材 2 を介在させたので、下面側から軒樋 1 を通じて突発的な応力が加えられても、この支持材 2 の補強作用で軒樋 1 の破損等を防止することができる。特に側面視が略三角状の支持材 2 を用いてカバー材を支持（受支）するようにした場合には、上面側から突発的な応力が加えられても、この支持材 2 の補強作用でカバー材 3 の破損等をも防止することができる。

【0034】

しかも、この第 1 実施例では、前記カバー材 3 の上端 3 4 が建築物の外装下地 C（に固定された軒先唐草 5 D）に固定されているので、カバー材 3 は軒樋 1 ばかりでなく支持材 2 をも引っ張るように保持するため、各部材 1 ~ 3 との一体性が極めて高くなり、且つ支持強度が極めて高くなる。

【0035】

また、前記軒樋 1 の水平面 1 2 2 上に、前記支持材 2 の平板部 2 1 の下端を配設するので、常時排水部 1 0 の上方に支持材 2 が配置されることにより、支持材 2 の下端が常に雨水に浸っている状態を回避でき、特に金属板材等の成形品である場合等における腐食等を極力避けることができる。

【0036】

図 2（a）～（c）に示す第 2 実施例の支持材 2' は、略垂直状に形成される縦面部 2 3 の上方に、傾斜状縦面部 2 3' が配置されている点のみが異なる以外は、前記第 1 実施例の支持材 2 と全く同一であるから、図面に同一符号を付して説明を省略する。

なお、図 2（d）には、折り曲げ加工前の展開図を示した。略三角状の平板部 2 1 の上辺に傾斜面部 2 2 が形成され、側辺に傾斜状縦面部 2 3' 及び縦面部 2 3 が形成され、この縦面部 2 3 の下端を略水平状に折り曲げて水平支持面 2 4 が形成され、下方が開放する溝状空間 2 0 が形成されている。これらの傾斜面部 2 2、縦面部 2 3 及び傾斜状縦面部 2 3' は、前記平板部 2 1 をそれぞれ略垂直状に折曲して形成されているので、部材としての強度が高いものであり、これらの傾斜面部 2 2、傾斜状縦面部 2 3' には、ビス 2 b, 3 b を打ち込むための孔 2 2 1, 2 3 1 がそれぞれ形成されている。即ち傾斜面部 2 2 が受支部であり、傾斜状縦面部 2 3' が固定部である。

10

20

30

40

50

【 0 0 3 7 】

図 3 (a) に示す第 3 実施例の支持材 2 " は、溝状空間 2 0 " が下方から挿着可能ではなく、側方から挿着可能である点のみが異なる以外は、前記第 1 実施例の支持材 2 と全く同一であるから、図面に同一符号を付して説明を省略する。

また、同図に示す軒樋 1 " は、形状としては前記第 1 実施例に用いた軒樋 1 と同様であるが、側面 1 3 の下端 (L 字状部分) が下方取付部として機能しない (上方取付部が存在しない) ので、側面 1 3 にビス 1 b を打ち込んで躯体 5 A に固定する以外は、前記第 1 実施例の軒樋 1 と全く同一であるから、図面に同一符号を付して説明を省略する。

【 0 0 3 8 】

図 3 (b) に示す軒先構造は、前記第 3 実施例の支持材 2 " 及び軒樋 1 " を用いた以外は、前記図 1 (a) に示した軒先構造と全く同一であるから、図面に同一符号を付して説明を省略する。

10

【 0 0 3 9 】

図 4 (a) に示す軒先構造は、第 4 実施例の支持材 2 G と軒樋 1 G とを用いたものである。この実施例における支持材 2 G は、前記第 2 実施例と同様に傾斜状の躯体 5 A ' に適用する傾斜状縦面部 2 3 ' を備えているが、図 4 (c) の左方に示すようにカバー材 3 を受支する傾斜面部 2 2 が連続状ではなく、上端付近と下端付近とに分割して形成されている点異なる以外は前記第 2 実施例と全く同様であるから、図面に同一符号を付して説明を省略する。

また、この第 4 実施例における軒樋 1 G は、図 4 (b) に示すように部位の寸法が異なり、且つ軒先形状 (係合部 1 4 g) が相違する以外は、前記第 1 実施例と全く同様であるから、図面に同一符号を付して説明を省略する。即ちこの軒樋 1 G における係合部 1 4 g は、深い下向きの傾斜状面と浅い下向きの傾斜状面 1 4 1 とが連結された形状であって、側面 1 2 を形成する水平面 1 2 2 の軒先端から延在している。そのため、この軒樋 1 G は、下り傾斜状の軒先端が形成されることになり、カバー材 3 を伝う雨水が裏面側へ廻り込み、更に建築物側 (図では右方) へ伝おうとしても傾斜状面 1 4 1 にて確実に雨水を落下させてそれ以上の伝わりを防止できる。

20

【 0 0 4 0 】

なお、この図 4 (a) に示す軒先構造は、建築物の外装構造 9 F が前記図 1 (a) や前記図 3 (b) 等 に示した横葺き外装構造とは異なる横葺き外装構造であるが、この外装構造 9 F における図中の符号は、8 G が横葺き外装材、8 H がそれを取り付ける吊子、7 D が下地 (木毛セメント板) 、7 E が断熱材を示している。

30

【 0 0 4 1 】

図 4 (c) , (d) に示す第 5 実施例の支持材 2 V は、前記第 4 実施例の支持材 2 G を本体として用い、該本体 2 G に L 字状の調整片 2 S をボルト 2 X , 2 Y にて組み合わせた構成である。なお、本体 2 G の平板部 2 1 及び調整片 2 S の横面 2 7 には、それぞれ孔 2 1 2 , 2 7 1 が形成されている。

この支持材 2 V の角度調整は、建築物の躯体 5 A の傾斜角度に適應するものであって、調整片 2 S に設けた横面 2 7 を本体 2 G の平板部 2 1 に接面状に沿わせ、前記孔 2 1 2 , 2 7 1 が連通するように取り付け、図 4 (d) より明らかなようにボルト 2 X が回転軸となり、任意の角度に調整した後に縦面 2 8 を固定するボルト 2 Y が固定ボルトとなるように用いる。

40

【 0 0 4 2 】

図 5 に示す軒先構造は、前記第 5 実施例の支持材 2 V を用いたものである。

この図 5 軒先構造は、以下の外装構造 9 D が適用されているが、躯体 5 A ' の傾斜角度に応じて本体 2 G に対する調整片 2 S の角度調整を行って取り付けている。

前記外装構造 9 D は、縦葺き外装構造であり、傾斜状に配設された建築物の躯体 5 A ' の上方に構築されている。

前記外装構造 9 D における図中の符号は、8 A が縦葺き外装材、8 B がそれを取り付ける吊子、8 C が天井材、7 A が下地 (木毛セメント板) 、7 B が躯体を示している。

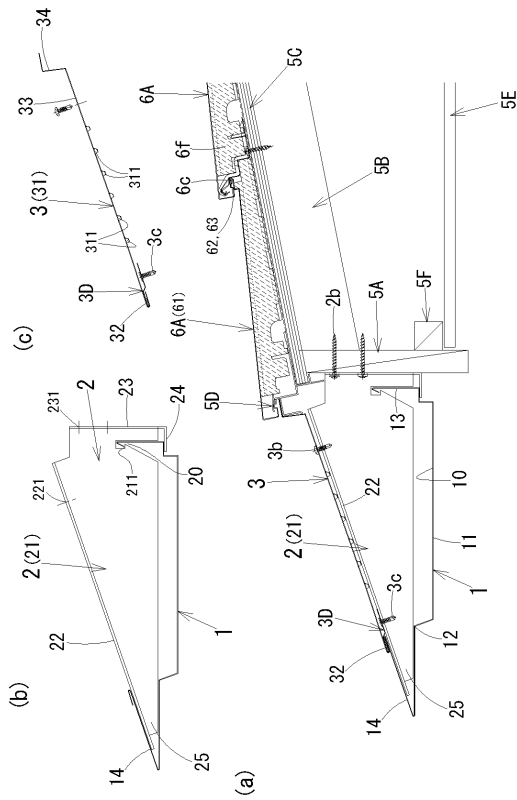
50

【符号の説明】

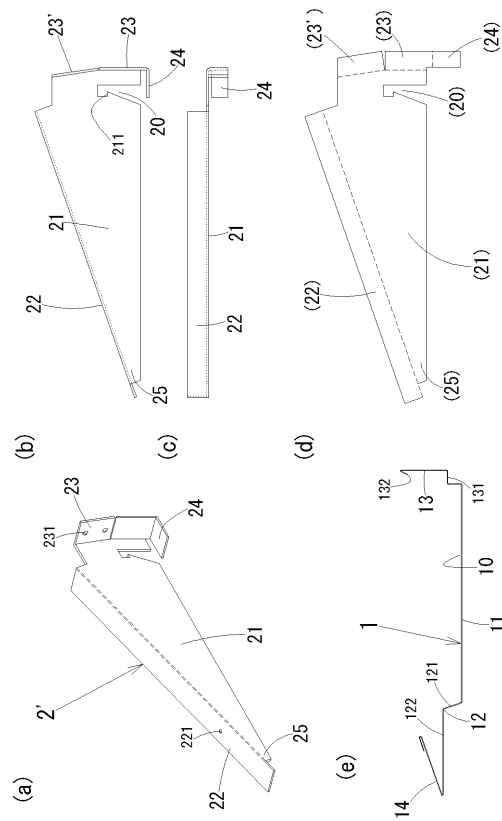
【0043】

1, 1'	軒樋	
1 1	底面	
1 2	(軒先側の)側面	
1 2 1	傾斜面	
1 2 2	水平面	
1 3	(構造物側の)側面	
1 4, 1 4'	係合部	
2, 2', 2'', 2 G, 2 V	支持材	10
2 S	調整片	
2 b	ビス(固着具)	
2 0, 2 0'	溝状部分	
2 1	平板部	
2 1 1	上方取付部	
2 2	傾斜面部(受支部)	
2 3, 2 3'	縦面部(固定部)	
2 4	水平支持面(下方取付部)	
2 5	被係合部	
3, 3'	カバー材	20
3 b	ビス(固着具)	
3 1	化粧面	
3 2, 3 2'	軒先端	
3 3	上端部	
5 A	躯体(鼻隠し壁面)	
5 B	H形鋼	
5 C	木毛セメント板(外装下地)	
5 D	軒先唐草	
6 A	横葺き外装材	
6 1	面板部	30
6 2	軒側成形部	
6 3	棟側成形部	
9 D, 9 F	外装構造	

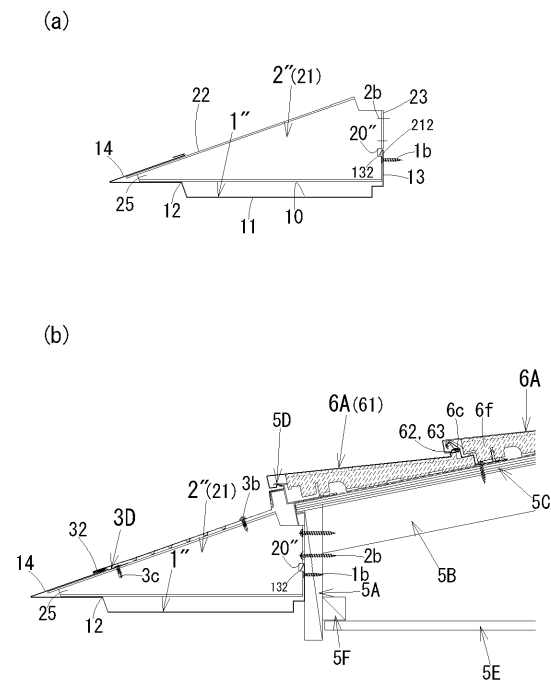
【図 1】



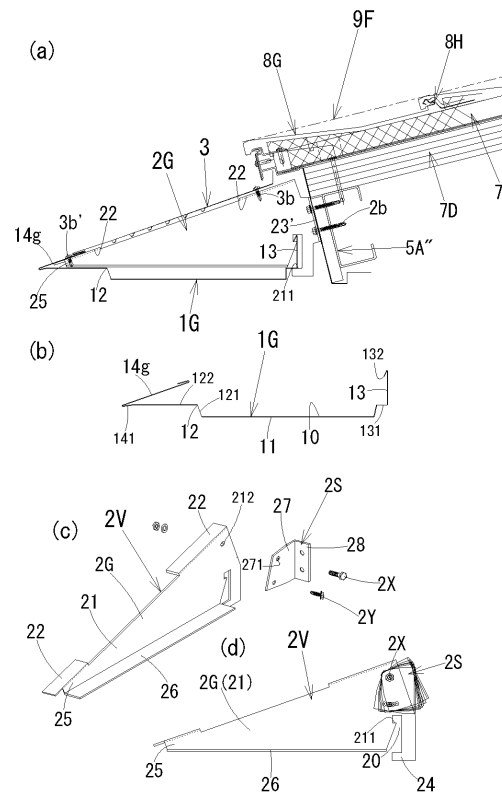
【図 2】



【図 3】



【図 4】



【 図 5 】

